



After

撮影：川村 喜一

当館の名前の由来である「アルプ」は、1958年に哲学者で詩人の串田孫一が中心となり、創文社によって創刊され、25年後の1983年に300号をもって終刊した山の文芸誌です。表紙はおもに山をモチーフにした素朴な版画があしらわれていました。

一昨年、当館設立30周年を記念し、2階の一部をリニューアルし、前館長・山崎猛の希望でもあった「アルプ」全300冊を一挙に展示した部屋を公開しました。空間設計と施工を担当したのは、斜里町内の制作チー

## 「アルプ」全300号 展示室について



Before

〈改装前〉もともとは焼き物、織物、能面など和の工芸品の展示室でした



改装中の様子。壁を深緑色に塗り上げました

ム・北暦と小坂建築。もともと和の工芸品を中心に展示していた一室に新たに壁を建て付け、1階「串田孫一の居間」の壁と同じ深緑色に塗り上げました。

串田孫一さんが1992年の開館に寄せた「この美術館のあるところから、病める地球が見事に癒されて行く爽やかな緑が、先ず人々の心に蘇り、ひろがっていくことを願っている」という言葉から、この色にこだわりました。

また、串田さん、大谷一良さん、畦地梅太郎さんが手掛けた表紙の原画を当時の指示書きとともに展示しています。「アルプ」制作に向けた作家たちの情熱が伝われば幸いです。

# 2024企画展のお知らせ「所蔵作品展－アルプの表現者たち－」

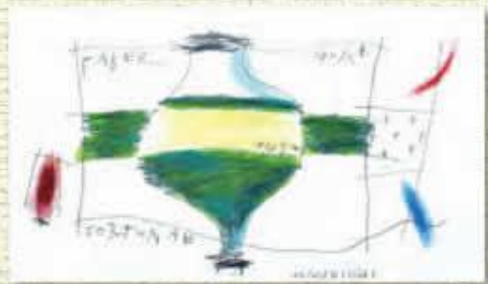
会期 2024年6月14日(水)～2025年5月25日(日)



大谷一良「赤い月」



栗田政裕「洋燈」



串田孫一「宇宙の運命」



田中清光  
【デカルコマニー 2001年】



熊谷権「林道（ニセコ）」



一原有徳  
【支笈湖より見た恵庭岳】



畦地梅太郎「山のとり」

初めて展示する作品が多く、アルプの挿圖の銅版も展示しており、見ごたえたっぷりですよ！



イラスト：砂山裕子

館長からひとこと

本展では、山の文芸誌「アルプ」に参加した作家たちの絵画、版画、書、直筆原稿、挿絵原画などを展示いたします。個性豊かな作品をご鑑賞ください。  
〈展示作家〉足立源一郎、畦地梅太郎、飯島康行、石川滋彦、一原有徳、岩見禮花、大高慶子、大谷一良、岡部牧夫、尾崎喜八、城所祥、草野心平、串田孫一、熊谷権、栗田政裕、小谷明、坂本直行、曾宮一念、高田博厚、田中清光、辻まこと、徳本立憲、永野英照、深田久弥、藤江幾太郎、真垣武勝、宮下啓三、山口耀久、山室真二（50音順）



12月1日 大掃除



10月14～31日 しれとこハロウィンの森

2023年の振り返り  
3月1日 開館  
6月14日 大谷一良展「山からのおくりもの」(～11月30日)  
10月14～31日 しれとこハロウィンの森 in 北のアルプ美術館 (主催・しれとこハロウィン実行委員会)  
11月30日 仕事納め  
12月1日 大掃除(ボランティア参加者9名)

## 寄稿① 版画をめぐる冒険

大谷 羊平《東京都大田区/会社役員》

父の大谷一良が亡くなったのは、2014年の9月。早いものでもう10年近く経った。それでも我々姉弟の中で、いつでも父のことが話題に出て、思い出話をする機会が多いのは、父が残した多くの版画と、それらの版画のファンの皆様のおかげだなど心からありがたく思っている。

もしれない。  
昭和一桁世代としては珍しく一人っ子であった父としては、家族と過ごすよりもその気配を感じながら一人で何かをしている方が心地よい時間だったのかもしれないとも思う。

父は、商社マンという仕事柄、朝早く家を出て、夜も会食等で遅く、平日はあまり会う時間がなかった。週末の朝はゆっくりで、遅い朝食を済ませるとすぐに家族からは仕事部屋と呼ばれていた自分のアトリエにこもって、モーツァルトを聞きながら版画をしていたので、週末の夕食時くらいしかゆっくりと家族と話す機会はなかった。

一方で父は、人付き合いは嫌いでない人だった。家族との時間はあまり取らなかったが、来客は大歓迎だった。高校時代からの友人、大学やアルプの仲間、後年はファンの方々など自宅を訪れてくださる人には、好きなワインを出して接待していた。

思い返すと父はマメで几帳面な人だった。そんな父の性格には版画という趣味であり楽しみはとでも合っていたのだと思う。あの緻密な作業は、商社マンという仕事のストレスを忘れる、自分にエネルギーを注入するために必要なものだったのか

そんな中から、北のアルプ美術館の山崎さんやいくつかの画廊などの家族も含めたご縁が生まれ、新たな地を訪ねる機会や楽しみも出来た。そして時は巡り、父の版画をネットで見た若い方からのお声かけにより北の大地のお菓子のパッケージになり、父も知らない若いファンが増えてきている。これからも父の版画が縁をつないでくれる新しい出会いが待っているのかもしれないと思うと楽しみが広がる。

## 寄稿② タイムマシンをつくる

三好 大輔《長野県松本市/映画監督》

地域映画なるものをつくっている。市井の人々が記録した日常の記録である8ミリフィルムを集め、その土地の人たちと一緒につくる映画だ。8ミリフィルムは主に昭和30年代から昭和50年代初めに一般の家庭に普及した映像記録メディアである。その後、映像メディアはビデオに変わり、フィルムは衰退していった。今、再生するための映写機の故障やフィルムの劣化、撮影者の高齢化で、フィルムの収集は年々困難になってきている。

餅つき、海面が真っ黒になるほどの鮭の遡上、空に聳える流水山脈、根北線最後の日、防波堤を飛び越える高波、以久科の原生花園に広がるエゾスカシユリ、知床半島の番屋や難破船、昔はどこにでもあつて今は無くなってしまった風景が重なる。

斜里に通い始めたのは3年前。写真家の石川直樹さんに誘われたのがきっかけだ。人口1万人ほどの町でフィルムが見つかるか不安もあつたけれど、フィルムは順調に集まり、1本の映画をつくる予定が、「もつと昔の斜里を見たい」という町の人たちの声に応え、気付いたら3年も通うことになった。集まった150本ほどのフィルムを元に3本の映画が完成した。

映画を発明したりユミエール兄弟が映し出したのもまた、赤ん坊の食卓や町の風景など、日々の生活を切り取った短い映像だった。撮りたいと思う本能的なものが向ける被写体は今も昔も「日常」の中にある。市民の何気ない記録の中に映画の本質を感じずにはいられない。

フィルムに映されているのは、何気ない日常の暮らした。路地で遊ぶ子どもたち、家族が連なるソリ遊び、ご近所とのお

「三好さんはタイムマシンをつくっているんだね」とある人が言った。映画を見ているひとたちは、知らない誰かが記録したフィルムを見ながら、自分の記憶の中の風景を旅しているように見える。斜里町は世界遺産の町として語られることが多いけれど、人々の心の中にある風景こそ世界遺産なのではないか。大袈裟な言い方かもしれないけれど、ほくはそう思っている。





## Media

ウェブマガジン  
各媒体で当美術館が  
紹介されています

※2月に当館にて撮影。中央が川内さん、  
後列左から2番目が中山さん

未知の細道



コロカル



ウェブマガジン「未知の細道」で作家・川内有緒さんが当館の歴史や斜里の魅力を紹介しています。前館長・山崎猛が登場している「コロカル」内の記事（斜里町のライター・中山よしこさん取材）も併せてお読みください。



## Book

当館1階にて  
串田孫一著書  
お読みいただけます

1階本棚に展示している串田孫一さんの本を館内読書コーナーにて自由にお読みいただけるようになりました。気になる1冊を手にとってみませんか。

## Alp Museum



## Information



## Art for sale

大谷一良さんの  
版画作品を  
販売中です



作品販売ページ

2024年10月31日までの期間限定で、大谷一良さんの版画作品を当館および当館のホームページにて販売しております。この機会にぜひお買い求めください。



## Obituary

「アルプ」編集委員  
作家の  
山口耀久さんが  
1月10日に他界

※写真は2018年撮影

山口さんは2010年の夏、著書「アルプの時代」執筆のため、2ヵ月ほど斜里に滞在されていました。仕事の合間に、町の人たちとも多く交流されて思い出もたくさんの方です。97歳でした。ご冥福をお祈りいたします。

8月11日(日)「山の日」にイベント開催予定です。詳細は決まり次第、公式サイトや公式Xで発信します。

## 編集後記

4月初め、ちいさな紳士がお母さんとやって来て美術館の部屋で小学校入学の記念写真を撮っていきました。以前には婚礼衣装のカツプルが白樺林や美術館の前で撮影をしたこともありました。祝いの門出に美術館がこのような形のお手伝いができること、そして誰かにとって思い出の場所になっていること、とても嬉しく思います。(山崎)

長い間、更新のなかった常設展示室(2室)の一部を展示替えしました。道東にゆかりのある作家による、四季折々の斜里岳の絵画作品を紹介します。企画展と併せてご覧下さい。(上美谷)

## アルプ基金・寄付金 報告

2023年4月1日から、2024年3月31日まで、1,434,801円となっております。ご協力、ご支援に心より感謝とお礼を申し上げます。

公式サイト



北のアルプ美術館 北海道斜里郡斜里町朝日町11-2  
TEL.0152-23-4000 <http://www.alp-museum.org>  
夏期(6月~10月)10:00~17:00 冬期(11月~5月)10:00~16:00  
月・火曜日 休館(12月~翌年2月末は冬期休館)

北のアルプ美術館たより「緑風」No.32  
2024年6月発行  
編集:山崎ちづ子/上美谷和代  
編集補助・デザイン:中山よしこ  
印刷:街斜里印刷